

食料・農業・農村政策審議会農村振興分科会農業農村整備部会 平成 17 年度第 2 回国際小委員会議事録

日 時:平成 18 年 2 月 16 日(木) 14:00 ~ 16:00

場 所:農林水産省 第 2 特別会議室

角田事業計画課長

本日はお忙しい中、委員の皆様におかれましてはご出席いただきまして、誠にありがとうございます。ただいまから農業農村整備部会平成 17 年度第 2 回国際小委員会を開催させていただきます。

1 月 6 日付で局長が代わりました。新たに農村振興局長に就任した山田農村振興局長でございます。

開会に当たりまして、山田局長からごあいさつを申し上げます。

山田農村振興局長

1 月 6 日付で農村振興局長に異動してまいりました山田でございます。よろしくお願いいたします。

本日はお忙しい中、ご参集いただきまして大変ありがとうございました。

この国際小委員会でございますが、皆様ご案内のとおり、農林水産業、あるいは全体の貿易の関係では今、随分と枠組みが変わりつつある、あるいはこれから変わろうとしているところでございます。これはもう皆様ご案内のとおり、FTA の交渉、これは日本とほかの国だけではなくて、それぞれいろいろな国がいろいろな国と FTA の交渉をやり、また関税の引き下げ等に取り組んでいるということ。それから WTO の交渉、これは今のところどうなるのか私どもよくわからないところでございますが、4 月末にはモダリティを決め、7 月末には譲許表を出し、今の予定では来年から新しい枠組みでやっていこうということ交渉しているということでございます。

WTO 交渉はどうなるかよくわかりませんが、長い目で将来のことを考えますと、だんだん貿易の枠組み、貿易障壁が下がって行って貿易が自由になっていくというような、まさに新しい国際秩序が出来つつある状況にあるかと思えます。

こういう中で、農業農村開発協力の面について世の中の貿易ルールなり世界的な枠組みが変わっていく中でどのように私どもとして取り組んでいったらいいのかというようなことから、この国際小委員会でいろいろご議論いただいて、このように進むべきではないかというようなお話をいただけるということで、非常にありがたいことでもありますし、いろいろご議論いただきたいと思っておりますので、何卒よろしくお願いいたします。

本日の議題につきましては、そこに書いてありますように、今言いましたような農業農村開発協力のこれからのあり方のご議論、これはこれまでご議論してきていただいたものを取りまとめようということですし、それから国際的な会議、昨年 9 月に開催されました国際かんがい排水委員会の第 19 回総会、第 56 回の国際執行理事会の結果、あるいは昨年 11 月、韓国で開催されました国際水田・水環境ネットワークの第 2 回運営委員会の結果のご報告、ことし 3 月にメキシコで第 4 回の世界水フォーラムが開催されるというようなことをご報告なりご議論いただこうと思っておりますので、よろしくお願いいたします。

特に第 4 回の世界水フォーラムにおきましては、国際水田・水環境ネットワーク(INWEPF)とICIDアジア地域作業部会が水田あるいは水田農業用水の多面的機能をぜひ世界に注目されるように分科

会や展示を行っていかうということも考えております。そういうことにつきましてもまたご意見等いただければと思っております。

最初に申し上げましたけれども、世界全体、貿易ルールも含めて変わっていく中で、私ども、農業農村の開発協力なり、かんがい排水の面でのさまざまな協力、事業の実施等積極的に取り組んでいきたいと思っておりますので、ぜひともご指導なりご指針のご議論をお願いしたいということでごあいさつとさせていただきます。どうも本日はありがとうございました。

角田事業計画課長

本日、長谷川周一委員、端憲二委員及び弓削昭子委員におかれましては、所用によりご欠席との連絡をいただいております。

それでは、以降の議事進行につきましては下村小委員長をお願いいたします。

下村小委員長

それでは、議事次第に従いまして進めたいと思っております。

本日はメインの資料が3つ、項目2つ、3冊出ておりまして、資料 1が1 1と1 2に分かれておりますが、「農業農村開発協力の展開方向」、資料 2が「今後の農業農村開発協力にかかる検討事項」。これまでの取りまとめと今後の検討事項ということで資料がつくられておりますので、事務局から一括してご説明いただいて、一括して議論をしたいと思っております。

それでは、よろしく申し上げます。

大平海外土地改良技術室長

それでは、事務局の方からご説明したいと思っております。資料は1 1の「農業農村開発協力の展開方向～取りまとめに至る経緯～」と1 2の取りまとめのもの、資料 2の横長の「今後の農業農村開発協力にかかる検討事項」の3つございます。

まず、資料 1 1の「取りまとめに至る経緯」でございます。前回もご説明をしたところですが、今までの取りまとめというところでございます。

まず、資料の1ページの左側にあります「21世紀における農業農村開発協力の展開方向」というのを98年10月に取りまとめました。その後いろいろな情勢の変化 ODAの改革、国際社会に共通の目標の策定とか平和構築の問題があり、2003年にODAの大綱の改定がございまして、「展開方向」の見直しの必要性の高まり、それとODA基本政策、中期政策、国別援助計画等も策定されたりしております。

この委員会の中では、16年度第1回にまずこの「展開方向」の見直しの基本方針の作成をご議論していただき、16年度の2回目に現状分析と協力実績の整理、17年度の第1回の国際小委員会、9月にございましたけれども、3番目の協力の実績の評価、協力の意義・目的、具体的な施策の方向をご審議いただきまして、今回の取りまとめということになったわけでございます。

2ページでございますが、「取りまとめ方法」でございます。右側に項目1、2、3、4、5とそれぞれありまして、1、2は16年度、3、4、5は17年度です。今回は一番初めに積極的に情報を発信しようということを考えていまして、まず「はじめに」というページを設け、今までの見直しに至る経緯を整理するとともに、写真を追加するなどして全体に発信型の冊子にしようということで、このような縦長の冊子形式に取りまとめた次第でございます。

それでは、冊子の方について説明したいと思います。お開きになっていただきますと、「目次」というところで全体の目次と全体のイメージにつながるような写真、これはアフリカのコートジボワールの田植えの写真でございますが、こういうことで開発協力によるプラスのイメージが何となくにじみ出るような写真を掲載しております。

めくっていただいて3ページでございます。「はじめに」というところで「わが国の経験と知見の活用」。これについて2ページほど書かせていただきました。左側には、アジア・モンスーン地域に位置する我が国の昔からのかんがい排水なり農業農村の発展のところを簡略にまとめてございます。それをイメージするような写真、水田農業と土地改良区による水路の話、これは参加型で最近我々は強調しているところですが、そういう写真。あと、このように歴史的にもかなり古いときから始まっているというようなことで、下に千数百年の歴史を有する満濃池の築造図をあわせて載せております。

右側のページは、開発途上国の現状なり、それに伴ってかんがい排水審議会の国際部会が98年に取りまとめた展開方向をこのような新しい課題に対応するために見直してきたという経緯をまとめてございます。

右側にはそれをイメージするような熱帯林の減少のインドネシアの写真を載せてありまして、右下には先ほどいいました農業農村開発の歴史を年表にまとめて載せておきました。(5ページからは、)前回、前々回にご審議いただいた内容でございますので、データを2001年だったものを2003年にするとか、そういう更新をしております。

6ページの右下には、栄養状況のところ、これはアンゴラの子供なのですが、こういう子供の写真を載せてイメージを膨らませていただこうかなと考えております。

またページをめくっていただいて、8ページの右側にジェンダーの開発指数とか農業部門・非農業部門における女性の労働人口の割合なども2003年の新しいデータに変えております。

それと、女性の労働というところで、ジェンダーの関係から、それをイメージするようなジンバブエの水くみの写真、タンザニアのメイズを粉にしているところ、こういう写真を載せておきました。

次のページをめくっていただきますと、「農業農村の位置付け」というところがございます。内容には特に変化はございませんが、その下は水田の中に集落が存在するというアジア農業(の写真)です。どこでもあるような風景なのですが、インドネシアにこういう風景がございますので、これを追加させていただきます。

次のページ、土壌劣化のところは、ここではよりわかりやすくということで世界の土壌劣化図を載せております。

次に11ページ、「水資源」のところでございます。水資源の説明の下に写真3枚追加しております。1つはベトナム。この水田の用水路は、用水路・排水路兼用水路でございまして、下から水をくみ上げる労力、ひしゃくによる水田のかんがいの写真を載せております。

12ページになります。それはNHKにも取り上げられましたけれども、地下水を揚水したインドのかんがいということで、過剰揚水量の話が上のグラフにありますので、それに合わせた写真を選んできました。右側はカーボヴェルデ。アフリカの芋畑でのかんがいの様子。農民の姿が帽子をかぶったりブレザーを着たりきれいなジーパンをはいたりして、多分写真を撮るためにきれいな格好をしたのかなというのがありますけれども、これは畝間かんがいをやっている姿でございます。

「平和の構築」についてはアフガニスタンの写真を掲載させていただきましたし、「災害復興」については一昨年のインドネシアのスマトラ沖地震のときの写真も掲載させていただきました。

15 ページにいきまして、「国際的議論の潮流」の中では、特に 2005 年にいろいろ会議が行われていましたので、それをこの一覧表の中に追加しました。1つは、一番上の黄色い枠組みの中にある砂漠化防止のところでございますが、条約締約国会議が 2005 年にケニアで行われていますので、それを追加しました。

右側の「持続可能な開発」では、2005 年に、国連の「北京 + 10」の世界閣僚級会合(第 49 回国連婦人の地位委員会)がございましたので、それも追加。同じように 2005 年にアジア・アフリカ首脳会議、通称バンドン会議といっていますが、それも追加しております。

「貧困削減」のところは、2005 年国連ミレニアム宣言に関する首脳会合、これも追加してございます。

右側の「砂漠化防止」も同様でございますが、右側の水色の中にありますが、最近話題になった地球ファシリティの話を追加しております。写真もあわせてニジェールの砂漠化の進む台地の荒涼としたところを載せました。

次に 17 ページ、「持続可能な水利用」のところでございますが、参加型についての記述が若干抜けていた嫌いがございますが、前回の議論の中で結論のところでは既に述べていましたので、それをこの中に組み込んでいます。パラグラフでいうと 2 つ目のところに「特に開発途上国では、開発された灌漑施設の多くが政府自らにより管理されてきたが、効率低下や過重な管理費負担が問題」云々で、PIM とか IMT の話を若干つけ加えました。

右側の「平和の構築」のところは写真の追加でございます。

次の 19 ページでございます。「持続可能な開発」というところでございますが、ここでは先ほど申し上げました 2005 年の会合、気候変動枠組み(条約)の京都議定書、「北京 + 10」の閣僚級会合、バンドンのアジア・アフリカ会議の 3 つを、右側の「人間の安全保障委員会報告書公表」の上の方に載せておきました。

右側の「貧困削減」についても同様に、右側の水色の一番下のところに国連ミレニアム宣言に関する首脳会合(2005)をつけ加えております。

次のページにまいりまして、「農業農村開発協力の実績」のところでございます。ページ数の関係で基本方針をここに組み込んだりしておきましたが、特段大きな変更はございません。

右側の「近年の状況」も、中期政策が昨年策定されましたので、最後にそれを追加したところがございます。

23 ページ、24 ページは、特に大きな変更はございません。そのところはデータの更新は行っておりますが、変更については大きく行っておりません。

30 ページをお開きいただきたいと思います。「農村振興局による協力」のところでございますが、「主要課題に対する農村振興局の主な協力の推移」ということで右側の真ん中から下のところに図がございます。その中で 2005 年以降に新たにスタートしている調査関係、右側の方ですが、自立支援型の黄砂の問題、地域資源利活用型の基礎調査の話、参加型復興支援の調査、そういうスタートしたものをさらに書き加えました。

それと左の「国際機関を通じた協力」のところでも、2005 年からスタートしましたアジア水田・水環境、黄色い枠組みの一番下のところに書き加えております。

次、3 番目の「農業セクターにおける成果の評価」というところでございますが、「砂漠化防止」。これは協力成果の波及状況の評価しようというような項目のところでございます。前回、アンケートに関するいろいろなお質問がございました。32 ページの下のところ、ニジェールの住民意識の問題です。水色っぽいところの図でございますが、184 戸の内訳というご質問がございまして、調べましたところ、答え

た 184 人のうち男の人が 167 人、女性が 17 人という結果でございました。これは上の方の 184 人のところにつけ加えております。

次の 33 ページは同じように土壌侵食の話ですが、まず 1 つは JICA の技術協力プロジェクト、赤い枠で囲んだところ。ボリビアの事業を追加しましたので、それを書き加えております。

下の評価のところでございますが、全体の標本数が少ないのでパーセンテージ(表示)をやめた方がいいのではないかと目黒委員からの指摘がございまして、当方としても、全体が 15 人でございますので、人数のところだけで数字はとめております。

「十分妥当である」とか「概ね妥当である」というところでより詳しい記述があればいいのではないかとこの質問もございましたけれども、当方、いろいろ資料をみてまいりましたが、なかなか詳しいものはなくて、残念ながらそこまでは書き込むことはできませんでした。

次、「村づくり」は図表で表現できるところは図表で表現して、文章は省略しております。

37 ページ、38 ページの「参加型灌漑管理」。先ほどボリビアの評価についてありましたが、これも全体が農民 19 人を相手にした調査でございまして、標本数が足りないということで人数表示にとどめました。

4 番目として「新たな視点」ということで、見開きの中におさめるような形に取りまとめてあります。細かい図とか説明があったのですが、見開きの中に 5 本の基本的な柱を入れ込むような形で編集し直しました。内容については大きく変えてございません。

次の 41 ページ、42 ページは、新たな視点を踏まえた展開方向を見開きでわかりやすくということで、左側に「新たな視点」、右側に「新たな展開方向」。人間の安全保障関係の灌漑開発の推進、復興支援とか地球環境のための「村づくり」への協力、持続型の技術開発、地域特性、効果的・効率的な協力の推進ということで、説明しやすいように見開きの中におさめるようにいたしました。

次の 43 ページから 1 項目ごとに見開きの中で説明できるように体裁を整えました。また、言葉だけではどうしても不十分なところがございますので、写真を追加しております。1 つは、日本でも同じなのですが、末端灌漑のところでは農民の方が維持管理をしている小用水路のゲートの操作の写真、あるいはタイで行っている農民水管理組織の全員集まっているところの総会の様子の写真を載せました。

次の 45 ページ、46 ページは「復興支援や地球環境にも資する『村づくり』協力の推進」のところですが、最初はアフガニスタンでこれからいろいろ我々もやっていきたいなということで、アフガニスタンの写真です。地元の人のお話を聞いてアンケートをとったりしながら、農村再生計画の策定を車座になってやっているところがございます。

バングラデシュでは、インドネシアにおける「村づくり」協力で用いられたストックファンドの手法を取り入れた FAO の事業が展開されているわけですが、下の写真はそれをやっているところで、具体的に個人通帳がどうなっているかというのをたまたま写真がございましたので、これを掲載させていただきました。

右側はラオスの集落内の給水施設。井戸なのですが、そういうところでみんなで見守りながら維持管理しているというような写真を載せております。

次、3 番目、47 ページ、「持続循環型の農業農村へ向けた技術開発」は特に大きな変更はございませんが、わかりやすくするために左側の真ん中のページに世界地図を載せて、その対策と世界地図での位置関係を載せておきました。中国西部、モンゴルの黄砂発生、あるいは地域資源利活用、東アフリカのエチオピアでやっている話、あとインドネシア等の地球温暖化防止、土壌侵食対策はパラグアイの方向に展開していきたいというようなところで、世界地図の中でわかりやすくお示しいたしました。

次に49ページの「地域の特性に応じ重点化した協力」ということで、左が東南アジア、右がサブ・サハラで、両方とも農民自身の手による用水路の建設の写真を掲載させていただくとともに、コンパクトにした詳しい資料は、ホームページのアドレスを下の方に掲げて、これを読む人が後でアクセスできるように編集しております。

次の51ページ、52ページの南西アジア、中南米における話も同様でございます。イメージが合うような、例えば「カナート」の水番の人とか、右側はボリビアで、土壌侵食の激しいところのベンチテラスで野菜を栽培して現金収入に充てているところの写真を載せました。

54ページは「南南協力・広域協力の推進」ということですが、往々にして南南協力と広域協力のイメージがダブってしまって誤解を招くということで、南南協力のイメージと広域協力のイメージを2つに分けてイメージ図を追加しております。

南南協力ですと、タイとかマレーシアとか開発の進んだ途上国が開発の遅れている途上国に我が国の支援を入れつつ協力していく姿です。広域協力の場合は、タイなどの技術やノウハウを有する、我が国が提供したセンターを中心に、そこに研修生が集まってみんなで議論しながらアイデアを出していくというような図を下の方にイメージとして載せました。

55ページの「協力体制の整備」、「現地ODAタスクフォースへの積極的な関与」、「評価」については変更ございません。

最後になりましたが、57ページ、「世界で活躍する技術者」というタイトルで、現在どういうところに農村振興局から派遣された技術者が活躍しているかということで、大使館とか国際機関とか個別専門家でございますけれども、色分けしながら現在全世界で行っている様子をここに掲載させていただきました。

前回までご議論いただいたものを冊子に取りまとめ、今後はこの資料を印刷に回して積極的に発信していこうと思っておりますので、今その編集を行っているところでございます。

資料2ではこれをもとに「今後の農業農村開発協力にかかる検討事項」というものをまとめてございます。お開きになっていただきまして、2ページのところでございます。これは若干今までの繰り返しになりますけれども、これからは真ん中の白い矢印で書いてある「施策の実現へ」ということで、今後は右側の赤い枠組みで囲ってある「施策の実現方法の検討」、それについて今までの国内外の知見を応用・汎用化していくというようなところで検討していきたいということになってまいりまして、その成果は積極的に発信していくなり、JICAとか国際機関、多国間協力につなげてまいりたいと思っております。

次をお開きになっていただくと、これも先ほど説明したのと重なるのですが、過去にプロファイとか地球環境保全対策とか村づくり、参加型灌漑管理をやっていて今何をやっているかというのを「現在」というところに赤い線でお示したわけでございます。これも先ほどご説明したので省略させていただきます。

4ページの3番目の「今後の検討事項」でございます。枠組みで書きましたが、「国外における主な経験と知見」を左側にまとめて、「展開方向」で方向を列挙しました。タスクフォースへの積極的な関与、体制の整備、NGO、地球温暖化、汎用化した農地・土壌侵食防止対策、循環型、村づくり、南南協力、使いやすい末端灌漑施設、農民の水管理組織という項目を挙げて「展開方向」でご議論いただいたわけですが、これを具体的に実現していきたいと考えておりまして、右側にそれをもうちょっと具体化した形でこういうものについて今後協力を進めていきたいと考えております。

最初はタスクフォースを通じたプロジェクトの形成、蓄積した情報のIT化とその情報の活用体制の整備、NGOとかいうのでも農民の自助努力を向上させる総合的な開発という具体的な案件。これについては今詰めているところでございますので、今後より具体化していきたいと思っております。

最後のページは参加型灌漑管理の実現方法ということで、今までの協力の実績とか参加型灌漑管理についてPIMとかIMTがありました、これと我が方の実績、タイを中心に書いてありますが、ミャンマーとかフィリピン、インドネシア、ラオス。農振局ではその成功要因とコア部分の抽出、国内における知見、そういうものを考えながら、右側に示してあります関係機関と連携した南南協力・広域協力の推進とか、右側の枠の中にあります貧困農民の水の確保には人づくりと制度・法律の整備で成功事例を有する国や、そういうものを十分活用して開発のおくれた周辺国に協力とか、計画段階から女性が参加して意見が反映されるような枠組みづくりとか、そのような成功要因のコア部分の共有とか、それを各国に適用する。これはイメージ図でございまして、このようなものを考えながら、より具体的に今後お示していきたいと考えております。

資料に基づいた説明は以上でございます。

下村小委員長

ありがとうございました。資料 1 2は既にご案内のものをベースに形を整えたということで、新しいものではないと思いますが、そういう意味で初見ということになりますと1 2と資料 2になります。従来に比べてちょっとコンパクトな資料でございますが、時間は十分にとっておりますので、この段階でいろいろコメントをいただいでご助言いただいでいいものにしていきたいと思っております。何でも結構ですからご発言いただきたいと思っております。よろしく申し上げます。

河野専門委員

今の段階になって基本的なことをお尋ねして申しわけないのですけれども、「農業農村開発協力の展開方向」という冊子を印刷して発信されるということでしたけれども、これはだれを対象にしてどのくらいの範囲で発信される予定なのでしょうか。

大平海外土地改良技術室長

援助関係者。JICA関係者とかJBC関係者はもちろんでございますし、我が方の組織の中でも援助に興味をもっている方には積極的にこういうものを使って研修していきたいと考えておりますし、今これを英文に倒す作業も同時にやろうと思っております。日本にも常駐事務所がございますし、国際機関にこういうものを使って、うちの方の局はこういうことを考えてますよという発信を積極的に行っていきなとと考えております。逆に日本文と英文ができることによって若い人たちに刺激が与えられればなということもあわせて念頭にもっております。

河野専門委員

わかりました。ありがとうございます。図表がいっぱい、写真もいっぱいで非常に魅力的なものになっていると思います。

細かい点を幾つかご指摘してよろしいでしょうか。

1つは図なのですけれども、これはエクセルでつくられたのをそのまま張りつけてありますよね。それだけ広く広報活動に使われるならば、ちょっと手を入れるともっと魅力的なものになると思うので、ぜひちょっと手を入れられた方がいいと思います。それが1つ。

もう1つは写真ですけれども、出典が明示されていないのは振興局の方で.....

大平海外土地改良技術室長

そうです。

河野専門委員

そうしたら、それを明示されたらいかがでしょうか。振興局の方でも実際に現場に行ってこういうことをちゃんとみてるんだということが、ちょっとしたことですけれども、わかると思いますので。

もう1つは53ページ、「効果的・効率的な協力の推進」というところで、そのページの真ん中あたりに図があって「NGOなどとの連携強化のイメージ」とあります。これは従来の場合も今後の場合も我が国から相手国へ矢印が一方方向へ向いているのですけれども、連携というからは両方向に向いた矢印の方がみる人にとってはいい感じを与える。連携というのは一緒に仕事をするからです、そのように変えられた方がいいのではないかと思います。

54ページの南南協力の矢印も片方向で、開発の進んだ途上国が開発のおくれている途上国に何かを提供するというイメージですけれども、そうではなくて、これも協力ですから双方向に向いた矢印の方がいいと思います。

とりあえず以上、細かい点でございます。

大平海外土地改良技術室長

ありがとうございました。矢印の点、ご示唆に富んだ意見だと思しますので、取り入れていきたいと思っております。

下村小委員長

ありがとうございました。

ほかにいかがでしょうか。

稲永専門委員

私も現在は農水の独法(独立行政法人)に勤めていますのでごくいいにくいのですが.....。非常によくできていると思うのですが、なぜ農村振興局がこれをやるのかということがよくみえない。中心になっている協力課題が砂漠化だと。なぜなのか。前回欠席しながらこういうのはあれですが、改めて今のお話を伺っていると、なぜ振興局なのかというのがわからないのです。

今いろいろなところでオールジャパンでやろうとしているわけで、これの全般をみますとJICAさんが書けばいいものようにもいえますし、オールジャパンというので大学とか他の省庁との関係が抜けています。大学は入っていますけれども、他の省庁はどうするのか。農水の中でも技術会議等でのそのような基本的な方針等出ていますし、そういうものの中でどのように位置付けられるのかというのはどこに書いてあるのでしょうか。

大平海外土地改良技術室長

最初の「はじめに」のところを若干そういう状況のところをお示したのですが、1つには全体の大きな話というのはどうしても我々の枠をはみ出るとかなという気がしますので、その辺はそこら辺にゆだねるのがいいのかなと。

もう一つは、農村振興局が持っている技術とか知見がありますので、それを活用した協力にはこういうものがあるだろうというものを示して、これを広く知ってもらうことによって、では今後の我が国全体が進んでいくときに、ああ、そういえばこういう知見とか技術とか開発したものがあるから、これを使ってやっていけばいいじゃないかというようなところの中に我々の協力を組み込んでいただければ我々としては大変幸せだと思っております。

稲永専門委員

そのお気持ちはよくわかるので、やはりぴしっとそういうところを明確にして位置どりですか、こうなんだということを可能であればもう少し出された方がいい。これだとODAと農業農村開発という2つのキーワードでやれば、JICAの農業農村部がつくれればいいような小冊子のようにも思えるので、その辺は明確に文言でちょっと強められるところは強めておいた方がいい。農水としてばらばらにやっているとられるのは非常によろしくないの、農水の中におけるぴしっと位置付けということも書き込めるところは書き込んでいただければと思います。

それから、非常に細かいことですが、多分これはケアレスミスです。8ページの写真、「主食のメイズ」となっていますが、日本語でちゃんと「トウモロコシ」というのがありますので、直していただければと思います。

以上です。

下村小委員長

ありがとうございました。こういう資料の場合、まず日本のODAというのが簡単に書いてあって、その中で農業についての支援がいかに重要かということがあって、日本でもいろいろな機関がやっています、そこで農水省はこんな形で貢献できる、あるいはしているというふうな形になると農水省だけの冊子をつくりましたということではない、このようなご意見でしょうね。その辺非常に貴重な指摘だと思います。

中條農村振興局次長

稲永委員のおっしゃる指摘は、実はこれまでいろいろな方面から聞いてきた話なのです。私も長期間にわたってODAにかかわってきたのですが、ODAというのは戦略は戦略としてまとまっています、おっしゃるとおりJICAベース、外務省ベースでの戦略は出るのですけれども、それではグラスルーツのベースというのはどうなんだという、これまた個別の話として出てくるわけです。間をつなぐものがないのです。

私ども、全世界に大使館員も入れて80人以上の専門家を出しているわけですが、それぞれの職員、あるいは行く専門家が自分たちの仕事というのは戦略の中で一体どういう位置付けにあるんだろうかというところになりますと、必ずしも全体の座標は明確になっていないところがありまして、これまで2～3年かけてやってまいりましたのはまさにその辺のところ。全体の中からそれぞれのパーツがどう位置付けされているかという見方もあるのでしょうか、逆にそれぞれの、例えば砂漠化の話にしましても全体の戦略の中でこれはどういう位置付けであって、その中でどういう具体的な協力が行われているか、そういう視点もあってもいいのではないかというような見方をしております。そういう意味で実際に現場へ出る専門家としましてわかりやすいまとめ方というものがあるのではないかと思います。ご指摘の点は十分踏まえていくつもりでおりますけれども、そういった意味合いでもこの検討の意味はあるということはひとつご理解ください。

下村小委員長

どうぞ。

目黒専門委員

今の点なのですが、私の非常に限られた経験から申しますと、例えばJICAの農業農村関連のプロジェクトというのは、実質的には農水省の方針があって、農水省関連の専門家の方々が専門家として展開するというふうな印象を過去に強くもっておりました。JICA全体の方針があっても、農業農村関連になると農水省のもっている基本的なアプローチが強くて、これは農水マターだというふうな感じでほかのところはなかなかタッチできない、そういうことが長年続いていたと理解しておりました。

そういう理解からしますと、このようにオールジャパンの枠組みを明確にして、それを踏まえた上で農水省がもっておられる知見を整理して、その中で最も効果的に使えるものが何であるかということを確認にして、これからのオールジャパンの枠組みの中にどう位置付けて展開していくか、そういう認識が出てきたんだと私は理解をしましたので、大変な前進だと思っておりました。

ただ、おっしゃるとおり、いろいろなところでばらばらにオールジャパンみたいなものが出てくるけれどもわかりにくいということは確かに印象としてあると思いますので、そこがはっきりすれば国民にとってもわかりやすい現場の専門家にとっても認識を明確にして作業ができるのではないかと、これまでの議論に参加させていただいておりました。

それはそれなのですが、私もちょっと質問がありますので、よろしいでしょうか。

NGOがどのように関連するかということなのですが、例えば(資料 - 2) 検討事項の4ページに「NGO等との連携強化」というのがあります。領域でいうと「NGO、大学、農民組織等」とある領域のところだけに「NGO等との連携強化」という文字が入っていますが、これはプロジェクト形成であれ、情報整備であれ、参加型灌漑管理であれ、すべてに関連することだと思うのです。NGOとの連携というのは、いわば領域としてはクロスカッピングなところですが、前々から私はジェンダー視点もクロスカッピングなのだと言っているのです。ODAの枠組みでも大変苦勞の結果、人間の安全保障のところにはジェンダー平等というのが出てきていないのですが、字面の点でクロスカッピングなものをどう入れるかが難しいというところでこのようになっている。そのODA大綱を踏まえてこれができているので、人間の安全保障のところにはしか入ってこない。人間の安全保障のところには、こちらの事務局としては最大サービスで女性の写真などを入れて女も入ってるよという印象を受けますが、ですから、NGOとの連携についても同様の問題があるのではないかと思いますので、フレームワークの中にどう入れるかというのは難しいかと思いますが、クロスカッピングなところはそれがみえるような入れ方ができるとより良いと思います。

NGOとの関連でメインの56ページ、現地ODAタスクフォースの図なのですが、「現地援助コミュニティ」というのは国際機関とかいろいろなものがある内容ですよね。

大平海外土地改良技術室長

はい。

目黒専門委員

これは大変重要だと思うのです。「民間企業、ボランティアなど」とありますが、NGOはすべてボランティアでもないわけですが、だからボランティアではなくて、ここは「NGO等」とした方がより包括的ではないかというのが私の印象です。

もう1つ質問は、(資料 - 2) 検討事項の最後の5ページの成功要因を積極的に活用するというところで、左下「成功要因の分析」の次に「成功要因のコア部分の抽出」とあります。右側にも「成功要因のコア部分の共有」をして「コア部分の各国への応用」とあります。このコア部分というのはどういう意味でしょうか。

大平海外土地改良技術室長

現在は確実にしているわけではないかもしれませんが、ここで適用可能なコア部分というのは、何を落とさないでやるのが大切なのかなというのを拾い上げようということで、実は何点かはあるのですが、まだ検討の最中でございます。

目黒専門委員

ありがとうございます。何でもここに関心をもったかといいますと、いろいろな事例があって、その経験をさらに生かしていくためにはいかに他の事例に応用するかということがかぎになる。これはどの領域でも同じことです。その際に、ある特定の部分、固定的な要素がいろいろなところに汎用できるかということについてはわからないわけです。そうすると問題は応用可能性です。それはその地域の状況と特定の目的によって規定されるわけです。ですから、その応用可能性がかぎなのではないかと思えます。

大平海外土地改良技術室長

そういう意味もございまして、2ページの「実現方法の検討」の中に「知見を適用・応用・汎用化」と、十分議論を尽くした単語でもなかったのですが、これが必要なということでここに入れさせてもらいました。

下村小委員長

今の最後の部分ですが、単なる応用という言葉でなくて応用できるかどうかの検討ということですね。それもそのとおりだと思います。

最後の5ページの図ですが、援助側からこれがベストプラクティスだということを押しつけるのではなく、ある程度成果を上げた国の経験の中から核になるような成功要因を抜き出して、もちろん今おっしゃったように、ある途上国の社会の中に分ちがたく結びついているものもあるでしょうし、ある程度応用できるものもある。そこのところを研究して応用できるものは応用するということを考えていきたいと思います。ということですので、今目黒先生がおっしゃったことと考え方は同じように思います。単に応用するというのではなくて、応用できるかどうかの検討もきちんとやるということで考えていただければいいのかなと思います。

目黒専門委員

追加ですが、コア部分というと確かにあらゆる状況に共通なものがあるはずだと私も思いがちなのです。ただ、例えばデモクラシーをいろいろな社会に適用して民主化を進めるということで、今いろいろな問題もあるわけですね。だから同じ要素であっても、それを一方的に押しつけるというふうには受けとめるという状況は十分にあるわけですね。コアというと固定的なものなので、そこのところをどのように取り上げたらいいのかなと、私も結論はないのですが、そこが悩みのところですよ。

大平海外土地改良技術室長

我々もこのところが悩みでございますので、今後いろいろ検討していければと思っております。

あと、先ほどのNGOのクロスカッティングの話、まさに私もそういう問題意識で考えておまして、書き方等でちょっと不十分な点もあったかと思いますが、先生のおっしゃるとおりクロスカッティングという認識は十分もっております。

下村小委員長

どうぞ。

畑専門委員

ちょっと教えていただきたいのですが、(資料 - 1 - 2の)21 ページに“pro-poor growth”という言葉が出ております。ここでは「経済成長を通じた貧困削減」と説明されています。よくわからないのですが、広範囲な経済成長を通じてというより貧しい方々にダイレクトに援助の手を差し伸べて全体的にレベルアップを図るといったニュアンスをもっているのかなと。ちょっとそのあたりを教えていただきたい。

先ほどのお話とダブってしまうのですが、今回3つばかりの協力のやり方が示されて、大変わかりやすく説明されております。非常に経験豊富な優秀な専門家を農村振興局から世界に派遣しておられるわけですが、例えば「国際機関を通じた協力」と29 ページあたりにありますが、そういう経験者、技術者が具体的にどのような形で、例えばFAOで日本の資金をもとにして実際の事業を主導的にやっておられるとか、そういうことがみえるような形で説明されるともう少しわかりやすいかなという気がいたします。

それと、細かいことなのですが、これは一般の方も対象になるということでありましたら、最初の3ページあたりに土地改良区とかがいきなり出てくるのですが、これは農民主体の組織であるとか、そういうことを一言説明されるとよりわかりやすいかなという気がいたします。

大平海外土地改良技術室長

どうもありがとうございます。3番目のわかりやすくというところでございますが、何気なく使っている言葉がわかりにくいということは十分考えられますので、その辺はもう一度気をつけてこの冊子を見直していきたいと思っております。

2番目の経験とかそういうところの具体例ということですが、冊子形式にまとめたので落としてしまったかなという嫌いもあるものですから、具体的な検討というところがございますので、今後その中でも示していければなと考えております。

あとは、説明する際には、イメージを膨らませていただく上で、例えばこれをパワーポイントで説明するようなどきには具体例を入れて、言葉をもうちょっと中身のあるものにしていきたいなと思っております。

最初の“pro-poor growth ”21 ページのところは今までの協力の実績のところとそういう基本的な考え方だったということで、全体を通して人間の安全保障というか、人に着目した考え方がこれから主流になってくるということで、この全体の冊子がそういう方向付けになっていると思って私たちはつくっておりますので、そういうところをわかりやすく説明していきたいなと思っております。

以上でございます。

下村小委員長

どうぞ。

稲永専門委員

(資料 - 1 - 2の)45 ページの「復興支援や地球環境の保全にも資する『むらづくり』協力の推進」というところで、資料 2の5ページ目の右側の図で、先ほど目黒先生のいわれたことと全く同じことになることを恐れますけれども、私も女性を主人公に置いていかなければいけないということは全く異議はないのですが、例えば今、文明の衝突とかイスラム社会というのは非常に微妙な関係になっていますので、誤解をされるような表現は避けなければいけないと思うのです。そういうところで最初から女性を全くそのとおりなのですが、この辺のところは十分気をつけないと思っています。

例えば相手国や現地の人々の状況、考え方を十分把握するというようなことを最初に入れて、そして女性もというふうにしないと、イスラムの社会は長い歴史の中でそれなりのやり方があるわけです。それについて、イスラム社会では女性が蔑視されているとか、その辺のところは非常に微妙な問題があるので、先ほど目黒先生がいわれたのもそれではないかと思うのですが、書きぶりは相当注意しないという問題がある。

私も先月、イスラム社会との文明対話というのに外務省さんの仕事で行ってきまして、向こうでいろいろの方に聞いてみますと、「イスラム社会は決して女性を蔑視はしてないよ。先進国の方がまるで女性を蔑視してるようにいってるんじゃないか」というように、かなりのレベルの人たちも今のこういう情勢の中で神経をとがらせていますので、この辺のところの書きぶりは……。女性というのは大変虐げられていると、自分が砂漠化、乾燥地をやってきて実感していますので、内容的には全く問題ない、書きぶりをもう少し配慮された方がいいのではないかと、せつかくの労作が間違っ相手に印象を与えかねないと思います。

大平海外土地改良技術室長

その辺、微妙なところは十分気をつけて取り組んでいきたいと思っております。

下村小委員長

今の点いかがですか。

目黒専門委員

済みません、たびたび、私が先ほど発言した成功要因のコア部分を強調することに関する懸念というのはちょっとニュアンスが違いまして、私が出した民主化という例がちょっと誤解を招いたかもしれませんが、成功要因というのは100%の応用性のある要素が果たしてあるかについてはよくわからないという意味で私は申し上げたのです。それと女性とかジェンダー平等とは違った要素と私は思っています。

NGOとの連携ということと同じようにジェンダー平等というのもクロスカッピングである。これは国際常識になっています。先生ご承知のとおり、国連でもそれが基本になっているわけです。ジェンダー平等は不可欠であるということは、イスラム社会においても共通です。ですから、それに余り配慮する必要はないと思うのです。ただ、プレゼンテーションは注意した方がいいということはいえると思います。

ご指摘の45ページ、アフガンのところで、「一方、ジェンダー平等、農村女性の能力強化」としますと何か唐突な感じも受けるわけです。多分先生はそのことをおっしゃっているかと思えます。イスラム社会だから女性については遠慮がちにいわなければならないということは全くないと私は思っています。

イスラム諸国の中で最近女性たち自身がいろいろな形で人権を主張しているという動きが大きくなっているようになっていきますので、これは今後ですから、将来展望のところでもそこを遠慮することは逆に日本の方が後退しているというイメージを与える懸念があるとすら思うぐらいです。

特にアフガンなどについては、ほうっておいたら女性たちは表に出てきません。しかし、地域生活を支えているのは当然女性たちなのです。ですから、女性たちが意見がないわけではなくて、どのイスラム社会でも同じような状況があるわけでは決してありませんので、そのように一括して遠慮する必要は全くないと思います。

稲永専門委員

遠慮ではなくて、イスラムの社会に入られたことはあるかと思いますが、それぞれ違うわけです。今イスラムの世界の中で、例えば私が専門としているサウジアラビアでも若い女性たちが自動車の免許をとらせる、自分たちの意見を国策に反映しろというような動きはあるわけです。イスラム社会の中でもそういうことがあるわけで、ジェンダー平等というのはいいいわけです。先ほどのような現地の人々の考え方とか習慣を尊重するというふうになればよくて、例えばここだと「農村女性の能力強化の観点から見た場合、農村女性の過重労働」と、広いところでみた場合に果たしてこういうことがいえるのかどうかということなのです。

今申し上げているのは、せっかく日本がやっていることが、イスラムをよく知らないで逆なですのような、誤解を受けるような書きぶりはやめればよいというだけなのです。例えば過重労働、ジェンダー、女性とかが出てきて、これをイスラムの人たちがみて誤解をしないように……。もちろん先生がいわれているように日本は遠慮することはないのですが、その辺のところは細心の注意をもってやった方がかえって変なところに巻き込まれないということだけあります。

西側の考え方、日本の考え方を決して相手に押しつけてはいけないということなのです。そういう観点で私は申し上げて、中身が間違っているといっているのではなくて対等の立場で相手の文明、宗教、習慣を尊重するという、その立場に立って書かれた方がよろしいのではないですかということなのです。何もジェンダーということを否定しているわけでは全くございません。

ちょっと長くなってしまいますけれども、ご承知のように、ちょっとしたボタンのかけ違いでせっかくのあれも壊れていきますので、これは特に日本の役所が書いているものですから、その辺は注意をした方がいいという意味であります。

下村小委員長

どうぞ。

目黒専門委員

私は先生と考え方を共有していると思います。ただ、相手の文明を尊重するという話と今の議論は次元が違います。ただ、アフガンが事例になっているようなところは、「農村女性の能力強化の観点から見た場合、農村女性の過重労働を解消する方策の一つとして」、ここに限定された話ではないのです。そういう意味では誤解を招くかという懸念はあるかと思いますが。

それから、「農村女性の過重労働」ということが農村女性の能力強化の観点の一つの側面ではあっても、直線的にこれだけというふうな印象を与え過ぎるのではないかと思います。

基本的に開発援助というのは外部からの介入ですから、これは明らかに相手のそれまでのステータス・クオに対する刺激を与えているという認識はもつべきだと思います。その上で相手との対話をしな

がら何を構築していくかということが肝心なところですから。だから相手の文明を尊重するという言い方をしますと、基本のところはノータッチというふうになると、これはどのように……。伝統という言葉は物すごく曲者で、何が伝統かと思ったら2,000年の伝統なのか100年の伝統なのかで内容が全く違ってきますので。

下村小委員長

ありがとうございました。これに関連してちょっと確認ですけれども、資料 2の4ページの3.の図にクロスカッピング・イシューが全体にかぶっているような図の書き方を考えていただいて、そこにNGOとかジェンダー、ほかにもあると思うのですけれども、何か入れていただく。個別のコマに入らないものがほかにもあるだろうと思いますが、その辺工夫していただければと思います。

ほかに別なテーマで何かご意見ありますでしょうか。 よろしいでしょうか。

今のお話は大変重要なポイントで、結局、相手の経済とか社会の営みに根づいているもののよさを尊重しながら、先方も国際的ないろいろな刺激を考慮して双方向で努力していくという姿勢が大事だという話だと思いますので、その辺のニュアンスを考えながら、45ページなんかちょっと見直していただければと思います。ありがとうございました。

それでは、ほかにないようでしたら次の議題に移りたいと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは、事務局から国際かんがい排水委員会(ICID)の資料に沿ってご説明いただきたいと思えます。

角田事業計画課長

それでは、私の方から国際かんがい排水委員会の関係についてご説明させていただきます。資料 3 1と3 2でございます。

前回の第1回の国際小委員会におきまして国際かんがい排水委員会の第19回総会、第56回国際執行理事会についての基本的な対処方針についてご説明申し上げたわけでございますけれども、その方針に沿って9月10日から18日にかけて行われましたICIDの総会並びに理事会に出席してまいりましたので、その状況をご報告申し上げます。

今回は総会と国際執行理事会ということですが、総会は3年に1回、執行理事会は毎年開催されており、北京におきましては、この2つが合わせて行われたわけでございます。全体の参加者500名ということで、総会があった関係でかなり多くの方が参加され、また参加国も56カ国、国際機関からの参加もあったという状況でございます。

日本からはICIDの国内委員会の委員長である中村良太先生を始め、農水省からは中條農村振興局次長、事務局からは私を含めて、本日この(国際小委員会の)委員も務められている畑先生もこのICIDの会議にご出席いただき、全体で43名が参加をしたところでございます。

いろいろな作業部会なりワーキンググループがこの中にあるわけでございますけれども、特に今回はアジア地域作業部会において中條次長からこの3月に行われます世界水フォーラムに向けた日本としてのスタンスを説明してきたということが大きなポイントだったかと思っております。

総会自体は、ここにありまして、「食料および環境持続性のための水および土地利用」というテーマのもとにさまざまなセッションが設定され、日本からも10名の方が参加してそれぞれ論文を発表されたというような経緯でございます。

次の2ページにまいりまして、執行理事会の報告でございます。執行理事会は、いってみれば最終日に全体の総括報告が行われるというような場でありまして、この報告に至るまでに、アジア、

ヨーロッパ、アメリカ、アフリカという4つの地域の作業部会があり、この作業部会での活動状況、全体で23個あるテーマ別の作業部会なりタスクフォースの活動状況について総括的な報告がなされたわけでございます。

特に日本の関係するものについて申し上げますと、2番目にありますとおり世界水フォーラムに向けた取り組みということでございまして、今回アジア地域作業部会が主催する形でかんがいの多面的機能に関するワークショップを開催いたしました。約10名の方から論文発表もあり、特にアジアを中心とする農業用水の多様な水の利用のあり方等についていろいろな論文が発表されたところでございます。

このワークショップの成果を出版物にまとめまして、水フォーラムに向けてこれを配布していくということでございます。これには日本から8,000ドル(US)を拠出したしまして、印刷製本を行っていくということも、意志表明したところでございます。また、このワークショップの成果については理事会の中においても報告され、ICID全体として一定の評価を受けたところでございます。

次にICIDの名称変更でございますけれども、環境への配慮ということが議題になっていて、それを組織の名称に反映させていくため、ICIDにEnvironmentのEを付けて、ICIDEという名前に変えていったらという事務局提案があったわけでございます。日本としては今までの名称を使うべきというスタンスで臨んだわけでございますが、ほかの各国からも同様な意見が出ておりまして、結論的には当然環境保護面への関与を強めていくということでもありますけれども、名称としては変更せず、今のままでいくということが認知されたところでございます。

それから、ICIDの規約の変更につきまして、若干細かいことでございますけれども、いろいろ提案がなされておりました。これについてはすべて承認されたという状況でございます。

3ページにまいりまして、ICIDの財政問題がテーマになっております。基本的には各国の拠出金とか総会あるいは執行理事会の参加費からの一定の拠出金で運営されているわけでございますけれども、財政がかなり厳しくなる状況の中で、財務体制をきちんと評価していこう、外部からの評価委員会も入れていこうというような提案がなされ、これについてはさらに検討を深めて来年のマレーシア会議で報告されるというような議論があったということでございます。

この執行理事会の1つのメインイベントで会長、副会長の選挙が行われたわけでございます。これまでマレーシアのケイズールさんが会長だったのですけれども、今回イギリスのピーター・リーさんが会長に選ばれたということでございます。

また、副会長は全部で9人おりまして、毎年3人ずつ交代ということでございますが、今回、中国、ナイジェリア、スイスの方の交代選挙があり、アメリカ、南アフリカ、中国の方が新たに副会長に選任されたということでございます。

あと1つ特筆すべきこととして、先ほど申し上げました23のワーキンググループがあるわけでございますけれども、その部会の中で一番実績を上げたところが表彰される最優秀作業部会賞を歴史部会が受賞しました。この歴史部会の議長は日本から出ている近畿大学の八丁教授ということで、これは日本としても喜ばしいことではなかったかと考えております。

今後の国際会議のスケジュールでございますけれども、2009年までこのような形で予定されておりました、来年度はマレーシアのクアラルンプールで執行理事会が開かれるというような運びになっております。

お手元に「Multiple Roles and Diversity of Irrigation Water」というパンフレットをお配りしております。これは今回のワークショップの一つの成果でございまして、かんがいの多面的な機能なり多様性ということをテーマにやったワークショップのメッセージを英文のパンフレットにまとめたものです。また、これ

とは別に 10 人の方の論文集を印刷しております、これをセットにして3月にメキシコで行われる水フォーラムに配布し、水田農業を中心とするかんがいの多様性についてメッセージを出していこうというような取り組みをしているところでございます。

次に資料 3 2でございます。これはちょっと事務的なお話でございますけれども、ICIDの国内委員会、先ほど申し上げましたように中村良太先生が委員長をされております。実はこれまで国内委員会の正式な規約がありませんでした。これは経緯から申しますと昭和 26 年に日本がICIDに加入するという事で閣議了解を経た上で国内委員会を組織しているわけでございます。委員長と事務局長は決まっていますけれども、どういう方が委員になっているのかとか、委員の選任規程とか、そういうところがこれまでなくて、実質的には平成 2 年にいろいろな意味での交流活動費が予算化されたときにICID活動推進委員会が別途設定されておまして、事実上この活動推進委員会が国内委員会の機能を担っていたというような経緯がございます。

2のところに位置付けを少し整理しておりますけれども、ICIDにつきましては農水省の組織令に事業計画課の所掌事務ということで位置付けられておりますし、この政策審議会の分科会の決定の中に農業農村整備部会がICIDに関する調査審議を行うということが位置付けられております。それを受けて、この国際小委員会において対処方針をご説明し、またその結果についてご報告させていただいているわけでございます。

今回、国内委員会の規約をつくらうということになった一つの背景でございますけれども、これはICIDの本部から各国、国内委員会強化のための規約をつくってほしいというような要請があったということが一つございます。それから、先ほど申し上げましたとおり、国内委員会の委員とか会長の任期に関する事務的な手続を定めたルールがございませんでしたので、ICID本部の方からの要請があったことも契機として整備していきたいというのがその動機でございます。

基本的には活動推進委員会が現在あって、そこが実質的な機能を果たしておりますので、その活動推進委員会を国内委員会として位置付けるという方向で規約を整備していきたいということでございます。

次の2ページに規約の案がございまして、第1条に「所掌事務と名称」を書いてございます。

第2条に「目的」としてICIDの諸活動への参画とICID加盟国、関係機関との連携・交流、積極的な情報発信を通じて、世界のかんがい排水等の技術の向上と食料供給の強化を図ることを目的とする。この最後のくだりは、ICID本部の目的と一致する書きぶりになっているところでございます。

「組織」としては、委員長、委員、事務局長、事務局ということで組織していきたいということと、委員の選任でございますけれども、事務局の方からの推薦で委員長が任命するという規定にしたいと思っております。

また、委員はICID本部の役員、また執行理事会等の委員会・作業部会に参画して活動していただくという規定でございます。

任期は3年といたしまして、再任は妨げないということでございます。

委員長は委員から互選するという規定にしております。

「活動内容」はここに書いてあるとおりでございます、委員会全体の活動方針の検討、運営であり、まずとICID本部の諸活動への参画ということを位置付けております。

3ページにまいりまして、事務局につきましては、農水省の組織令にあるとおりでございますので、事業計画課に置くということと、事務局は私事業計画課長が務めるというようなことを今回正式に規定させていただきたいということでお諮り申し上げる次第でございます。

以上、ICIDのことについてのご説明でございます。

下村小委員長

ありがとうございました。ご意見、ご質問、何かありますでしょうか。 どうぞ。

畑専門委員

先ほどお話しいただきましたように私も参加させていただきましたけれども、このICIDの中でも今回の Multiple Roles の水田の機能の話が強調されております。参加国としてはアジア諸国が中心になっておりますが、より広くそういうことを認識してもらうためには、ヨーロッパの稲作国等にも参加をしていただくことが効果的ではないかと考えています。次のINWEPFの課題になるうかと思えますけれども。

例えば、現在国際農業工学会長をしておられますポルトガルのルイス・ペレイラが今回もクエスション52というかんがいの効率の関係でキーノート・アドレスをされまして、その中にきちんと、単にかんがい水としての機能だけではなくて、より地域の環境とか水質の改善、そういう多面的な機能を評価して効率の中に入れるべきであるというような意見を出されました。

私も非常にすばらしいアドレスであったという話を彼にしておりましたら、今回ICID会長に選出されましたピーター・リーというイギリスのエンジニア、コンサルタントをずっと長くやっておられる方ですけれども、やはり来られましてそういう話になりました。そのときはまだ会長には選ばれていなかったのですが、選ばれた後のスピーチできちんとペレイラさんのスピーチが引用されまして、今後効率の問題に関してはマルチファンクションとか、そういう機能を考えていくべきであるというようなことがコメントされました。彼らの影響というのは非常に大きいですから、そういうところにもきちんと我々の情報は流していくことで、さらにアジア諸国だけではなくてヨーロッパ諸国、アメリカ等への影響が強くなるであろうと思った次第です。

下村小委員長

ありがとうございました。

ほかにありませんでしょうか。このパンフレットもよろしいでしょうか。

それでは、次の議題に移らせていただきます。最後に、「国際水田・水環境ネットワーク」、資料 4 についてよろしくお願いします。

鈴木農業用水対策室長

それでは、資料 4に基づきましてINWEPFの取り組みについてご報告させていただきます。

資料 4の1ページ目をごらん願いますと、中ほどに記載してありますとおり、INWEPFは国際水田・水環境ネットワークの英文の頭文字をとったものでございます。

この設立の背景、経緯でございますが、農業用水につきましては、国際的に欧米などによりまして乾燥・半乾燥農業地域を中心に議論される傾向にありまして、地下水枯渇や湿地の減少など農業用水が環境に悪影響を与える、そういった面が強調されがちな状況にあります。

具体的に環境保全のために農業用水の利用を規制するといったような議論にもつながっていく傾向にございまして、こういった乾燥地域での水利用の仕組みや課題が国際的に一般化されていくことは非常に問題があるということから、先ほど農業用水の多面的機能というお話がございましたが、環境へのプラスの側面を持つアジア水田農業の特質のアピールが重要であろうという認識を持ち、2003年

3月に日本で開催されました第3回世界水フォーラムの場で農林水産省といたしまして水と食と農、これに関する農業大臣会合を開催し、水田かんがいの特質、重要性をアピールしたところであります。

この大臣会合の提起を踏まえまして、我が国のイニシアチブで、主にアジアの水田と水利用に関する情報交換の場としてこのINWEPFを創設いたしました。2004年11月に第1回の運営会議を東京で開催いたしました、昨年11月に第2回の運営会議を韓国ソウルで開催しております。

参加国は、下に書いてありますとおり、アジアの国を中心に15カ国。水田ということですので、アジアの国が中心になります。現在、アフリカからエジプトが参加しております。国際的には、欧米も含めまして10の国際機関が現在このINWEPFに参加しております。事務局はその年の運営会議を実施する国の持ち回りということで実施してきておりますが、実質的には我が国が運営の主導をとっておるといような状況でございます。

2ページ目に移っていただきまして、このINWEPFの平成17年の活動状況でございます。

1点目は、平成17年に行われましたさまざまな国際会議の場におきまして、農業用水の効果的かつ持続的な水利用や水田農業の有する多面的機能について、INWEPFから情報発信に努めてきております。

2点目といたしまして、昨年の9月から10月にかけて「モンスーンアジアにおける水田農業の多面的価値」をテーマといたしまして、インターネットを利用してウェブサイト上に会議室を設けてバーチャルミーティングを開催しております。

3点目といたしまして、昨年11月2日から4日にかけて、INWEPFの第2回の運営会議、シンポジウムを韓国の主催のもとにソウル市内で開催しております。

このシンポジウムにおきましては、水田農業のもつ多面的機能の重要性、水利用の実態に係る共通認識の醸成を図るようなセッションを設けるとともに、特別セッションで第4回世界水フォーラムに打ち出していくINWEPFからのメッセージについて議論いたしました。

また、運営会議の場でINWEPFの1年間の活動報告、戦略的な活動計画の議論を行い、今年9月に第3回運営会議をマレーシアが主催することを決定しております。

我が国としても、主催者であるINWEPFマレーシア国内委員会と連絡をとりつつ、会議運営を積極的に協力、支援していこうと思っております。

3ページ目に移っていただきまして、第4回世界水フォーラムに向けた取り組みでございますが、この第4回世界水フォーラムは3月16日から22日にかけてメキシコのメキシコシティにおいて、「世界的課題解決に向けた地域の取り組み」をテーマとして開催されることとなっております。フォーラム全体の構成は、フォーラム本体で世界の水に関するさまざまな問題、テーマにつきまして約150のセッションが開催され、あわせて閣僚級の国際会議、また水フェア、水EXPOなどが行われることとなっております。

INWEPFといたしましては、3月20日に2時間ほど時間をとりまして国際かんがい排水委員会アジア地域作業部会との共催で「水田における持続的な水利用と多面的機能、より良いガバナンス」をテーマといたしましたセッションを開催する方向で今取り組んでおります。セッションの構成といたしましては、地域の取り組みの発表の後にパネルディスカッション、オープンディスカッションを行っていくよう検討を進めております。

4ページ目に移っていただきまして、この第4回世界水フォーラムでは、今申しました地域の取り組み（ローカルアクション）を重要視しております、これを踏まえて今回、INWEPF、ICIDのアジア地域作業部会のおのこの取り組みをローカルアクションとして発表していこうということで、INWEPFにつき

ましてはその設立の背景、趣旨の紹介、これまでの活動としてのバーチャルミーティング、昨年行われたシンポジウムの結果などを発表、運営会議で合意されましたINWEPFから第4回世界水フォーラムに向けてのメッセージを発表することを予定しております。

このメッセージの概要につきましては、ここに書いてありますように3点。1点目は農業用水のもつ多面的機能が十分に発揮されるようにすること。2点目といたしまして、地域に蓄積された経験と知識を踏まえた参加型の水管理を目指すこと。3点目といたしまして、適切な水管理に向けて行政も積極的な役割を果たすこと。これらの主要な3点、要旨として発表しようと思っております。

また、あわせて第4回世界水フォーラムの会期中、フォーラム会場内で企業や団体などによる水展示会、水EXPOが開催される予定となっており、この会場内にINWEPFの展示ブースも設置いたしまして、INWEPFの活動、我が国の水田・水田用水の状況を紹介する予定としております。

お手元資料5ページ目は第4回世界水フォーラムのテーマにつきまして、6ページ目は水フォーラムの全体スケジュール、7ページ目はINWEPFのこれまでの取り組みをフローにまとめたものを参考につけております。

以上でご報告を終わります。

下村小委員長

ありがとうございました。ご意見、ご質問等ございませんでしょうか。 どうぞ。

畑専門委員

何度も済みません。先ほど農民参加という話が出ておりましたけれども、最初からその点でいろいろ話題が出ております。先ほどのICIDとの関係でも、実際の具体的にこういう多面的機能等を発揮する上で農民の活動というのが基本になりますけれども、例えばICIDには農民参加のタスクフォースが立ち上がり、実際にオーストラリア等の農民の方が中心になって、いかにICID活動に農民が参加していくか、そういう提案をしようとしておまして、日本からも農民の直接の参加等ができないかというようなお話があります。實際上、大変難しい点があるかと思うのですけれども、今後の課題の一つとして、より農民と一緒にやっていく事業のあり方ということになってきますと、そういう点、これから考えていかなければいけない課題であろうかと思えます。

下村小委員長

ありがとうございました。

ほかにございませんか。

ちょっと私からご質問なのですが、今の資料の一番最初のところで、国際社会にはかんがいに対する環境のマイナス面があるという意見の話が出ましたが、先ほど配っていただいた水田農業のパンフレットは非常に有意義だと思います。日本では里山とか水田というといいイメージだと思うのですが、かんがいの方は、例えば学生なんかはかんがいというすぐ水資源の無駄遣いとか塩害とか、かなり単一のマイナスのイメージをもっていますので、この辺は相当広報宣伝をする必要があるかなと思っております。

ほかにいかがでしょうか。特にありませんか。

そうでしたら、そのほかの点で事務局の方から何かお話がありますでしょうか。

角田事業計画課長

本年度の国際小委員会は今回で最後ということになります。2回にわたる審議状況につきましては、3月にこの小委員会の親委員会と申しますか、農業農村整備部会がございますので、そちらの方に報告させていただきたいと思っております。1年間ご審議、いろいろありがとうございました。

下村小委員長

ありがとうございました。それでは、以上をもちまして、本日予定しておりました議事がすべて終了いたしました。議事進行を最後に事務局に戻したいと思います。

角田事業計画課長

本日はお忙しい中ご審議いただきまして、誠にありがとうございました。これをもちまして、第2回の国際小委員会を終わらせていただきます。どうもありがとうございました。

了